6　新潟市江南区砂崩遺跡の縄文時代遺物 ―神林慎一氏採集資料から―

(1)　はじめに

亀田砂丘の最も内陸部、第一砂丘列に砂崩遺跡はある。遺跡は1920年代に発見された〔新潟市2007〕。以来表面採集が断続的に行われ、縄文時代中期前葉を中心とした多量の土器や磨製石斧製作資料の存在が注目されていた。

ここに取り上げる資料は、神林慎一氏が1960年代に採集し、2014年１月に当センターに寄贈されたものである。内訳は、縄文土器454点・石器類16点・弥生土器１点・須恵器４点・搬入礫８点からなる。図１上段に示すように、砂崩遺跡は東西250m・南北200mの広がりをもち、神林氏の踏査当時Ａ～Ｆの６地点に区分されていた〔酒井ほか1966〕。寄贈された縄文土器には、全体の68％に採集地点名が記される。それによれば、Ａ地点126点・Ｂ地点17点・Ｄ地点12点・Ｅ地点145点・Ｆ地点７点となり、遺跡の北半部を中心とした採集品であることがうかがえる。註記によって採集地点が把握できる資料については、掲載番号末尾にアルファベットを示した。

砂崩遺跡は、新潟砂丘に立地する縄文時代中期の遺跡の中で屈指の遺物量を有する。本資料はこの遺跡の理解にあたり有益な情報を提供するものであり、主要な遺物を提示し若干の検討を行う。

(2)　縄文土器

復元土器１点・破片453点を数える。口縁部遺存資料に基づく最少個体数は54である。含有物は一様でなく、次の３グループに分けられる。Ⅰ類は磨耗した石英・長石や各種岩石を何らかの形で含む、Ⅱ類は破砕した石英ないし長石を多量に含む、Ⅲ類は破砕岩石以外の混入物に乏しく磨耗粒子が欠落するものである。

１・２は前期前葉土器。多量の石英や雲母とともに植物繊維を含む。ともに０段多条の単節縄文を施す。小破片のため環の有無や施文構成は明らかでない。60は肥厚した口端下に４条の沈線をめぐらす中期中葉後半段階の土器で、縄文時代遺物の下限資料となる。

以上のほかは中期前葉土器である。これらは若干の時期幅をもち、中期前葉の６期区分〔高橋1999〕に従えば２期から４期にかけての資料とみなされる。３・49は２期に属す。使用する施文具は、幅４～５mmの多裁竹管工具である。３は単節縄文を地文とし、幅広い間隔をもった平行沈線を口縁部の区画沈線下に垂下させる。49は口縁部文様帯の下端に簡略化されたＹ字状文を連続的に配す。波状口縁をなす54も２期に属す資料と考えられる。肥厚した口端から口縁部の無文帯にかけて縄（LR）の側面を平行に押圧するものである。

４～53・55～59は大半が３期の枠に含めうるグループで、神林氏採集資料の主体をなす。竹管工具は幅６～７mm台を中心とし、前段階に較べ幅広化する。胎土ではⅠ類・Ⅱ類が40％台で拮抗し、Ⅲ類は10％台にとどまる。

４・５・12～48は、越後平野周辺で一般的にみられる在地土器である。４・５は数段の横位区画を設け、画内を縄文帯とする。４は斜縄文を地文とし、口縁部区画下に三角形彫去を伴う鋸歯状の並行沈線と突起を配す。５は全体がうかがい知れる唯一の資料であるが、中間部を欠くため別個に示した。口径34.5cm・底径15cm・推定高51cmほどを測り、キャリパー形の上部器形と体部中ほどの膨らみを特徴とする。地文は上部と下部で異なり、上部にはLRによる斜縄文、下部には木目状撚糸文を施す。上半部の文様帯は、横位平行沈線によって３段に区画される。口端の突起下から２段目までに単位分割沈線を垂下させ、その直下にめぐる横位集合沈線の中央に斜縄文を加えた隆帯がめぐる。区画内には２段目・３段目に間隔の狭い従位平行沈線、体上部に曲線的な平行沈線文を描く。35は撚糸文を地文とした文様帯下端の資料で、区画沈線内に等間隔の縦位平行沈線を施す。

12～26は幅の広い口縁部文様帯をもち、体部に幾何学的な平行沈線を描くグループである。12～23は口縁部に設けた横位区画などに彫刻蓮華文を施す。文様構成にはバラエティーがあり、蓮華文下の縄文帯に縦位平行沈線を等間隔に配す12～15、無文帯をはさんで蓮華文が重層化する16、蓮華文下の無文帯に幾何学文様を施す20・23などの別がある。24～33は横位区画内に蓮華文以外の文様を充填するもので、24・25は三角形彫去文、26は軌軸文を施す。36～48は本グループの体部資料である。36～45は幾何学的な平行沈線文を施し、40・42は区画内に細線を加える。46～48は格子目文。地文としては、単節斜縄文（39・41）と撚糸文（36～38）の二種がみられる。

27～33は口縁部に設けた区画内に集合沈線を充填するグループで、27はＵ字文、28～33は縦位集合沈線を施す。後者には曲線的な平行沈線や突起を伴う場合があり、32は同一区画内、28・29は充填文様下の無文帯に配す。このうち33は、横位平行沈線の一施文幅が９mmに及ぶことから、４期に下降する資料とみられる。

以下はいずれも客体的な存在にとどまる。50～52は口端に横位平行沈線を施し、その直下を地文帯とする。50の右半部には縦位の集合沈線が加わる。53は「く」の字状に屈曲した体部破片。上端に刻目を加えた細い隆帯がめぐり、交互刺突を伴う単沈線の下端に小さな列点を施す。中期前葉３期に平行する五領ヶ台Ⅱ式土器である。

55は直立した体部と外傾口縁をもち、波状口縁の頂部に下端が突出した短い縦位隆帯を貼付する。器面全体がLRの斜縄文で覆われ、同一原体による２列の側面圧痕が口縁下に並列する。類似隆帯が阿賀野川流域などに分布しており、東北的な要素を認める在地土器と考えられる。これと類似器形をもつ56は、口縁下に配した横位隆帯に刺突を加える。58は内湾ぎみの波状口縁をもち、LRの縄を用いた刺突を端部に加える。

４～11・57は西蒲区豊原遺跡への偏在現象がみられる（図１下段）同遺跡Ⅵ群３類土器〔前山2009〕と類似する資料である。口縁部区画内の横位撚糸施文（７～９）・区画下部の突起（10）・突起下の体部分割沈線（11）に共通性を認める。このうち９・11は文様と混和剤の両面で豊原出土例と酷似した稀な資料である。一方、６は区画沈線下の曲線的な沈線に異質な要素が見られる。８は横位区画内に三角形彫去を施す点で豊原での少数資料にとどまる。10は突起の突出度が著しく、貼付位置のズレや突起下端のＵ字沈線を欠く点に変形が見られる。撚糸文を二方向に施す57は本グループを特徴づける地文パターンであるが、口端が肥厚する点で同一とは言い難い。

61～64は底面にスダレ状圧痕を認める。底部総数15個体のうち、８個体で同様の圧痕が確認できた。

(3) 石　　器

土器の採集量に較べ数量的に乏しく、敲石１点・磨製石斧１点・磨製石斧製作工程資料５点・砥石類６点・剥片３点・搬入礫７点を数えるのみである。神林氏採集資料には石鏃が存在したもようであるが、現存しないため詳細は不明である。図３に磨製石斧とその製作関連資料を示す。

65は磨製石斧の成品、66～69はその製作工程資料である。西頸城産の蛇紋岩を石材とし、いずれも製作時の擦切溝をもつ。65は上下両端が主面からの加撃によって破損する。最大幅4.5cm・厚さ3.1cmを測り、きわめて分厚い作りである。一側面の片側に擦切溝の痕跡が残る。66・67は大形石斧、68・69は小形石斧の製作に伴う資料。前者のサイズは65と近似する。66～68はその形状から、分割時の残余とみなされる。69は幅３cm・厚さ1.3cmを測る。小形石斧の素材となりうることから、分割時の破損品と考えられる。

砥石はいずれも粗粒砂岩を使用する。70は厚さ1.1cmの扁平な資料で、側縁を含む全面が磨耗する。擦切具として使用した可能性が高く、西蒲区豊原遺跡で中期前葉３期を主とした層準から類似資料が多数出土している。71は表裏両面に磨耗痕、片面に浅い溝が３条残る。磨製石斧の研磨に使用した資料とみなされる。

(4) ま と め

提示資料が意味するところを考える。前述のように、神林氏採集土器の大多数は中期前葉３期に属す。これらは北陸色の強い在地土器を主体とし、東北および関東的な土器や豊原遺跡Ⅵ群類似土器が付随する点で越後平野周辺における一般的な様相を見せる。

一方、混和材のあり方は異なる状況を示す。本遺跡の土器胎土は、前述のように３グループに大別できる。Ⅰ類の指標となる磨耗粒子は阿賀野川や能代川の砂粒に多く含まれ、新津丘陵秋葉遺跡の中期前葉土器の主要部分を占める〔前山2014〕。Ⅱ類は新発田市域の加治川・坂井川や笹神丘陵の川砂に類似する。新発田市狐森Ｂ遺跡や阿賀野市萩野遺跡の中期前葉３期土器群を特徴づける胎土である。Ⅲ類は角田山麓の砂粒に近似し、豊原遺跡Ⅵ群土器の卓越胎土となる。なお、狐森Ｂ遺跡および萩野遺跡の胎土は筆者の実見に基づいており、各河川の砂粒構成については図１中段左に示すとおりである。

砂丘地上に立地する砂崩遺跡は、土器製作に不向きな環境にある。混和材に認める多様なあり方は、複数方面からの搬入によって生じた現象とみることもできよう。豊原遺跡類似土器の中に同遺跡出土例と酷似する資料が含まれる点はこれに関連して重視すべきである。

石器は絶対量が乏しく、組成としての把握が困難である。ただし、本遺跡を含む縄文時代中期の新潟県北部エリアでは磨石・敲石類の卓越を特徴とするが、これらが採集品の中で皆無に等しい点は留意される。神林氏採集資料には搬入礫が含まれるところから本遺跡の実態を正しく反映する可能性があり、通常の集落とは異なる石器様相を示すことも考えられる。

砂崩遺跡の石器を最も特徴づけるのは、西頸城産の蛇紋岩を使用した磨製石斧製作資料である。この時期の越後平野周辺では南西27kmに位置する豊原遺跡で同一石材による磨製石斧の製作が盛んに行われ〔小野ほか1988〕、それとの関わりを想起させる。同遺跡が位置する角田山麓では、阿賀野川流域もしくは阿賀北産の花崗岩が縄文時代前期前葉以来持ちこまれ、中期前葉以後は新発田市板山産黒曜石の利用が一般化する。

以上のようなことがらは、越後平野の中央部に位置する本遺跡が交易活動の拠点として機能し、豊原遺跡類似土器の分布域拡大にも関与した可能性を示唆するものといえる。本遺跡では南部の一角で平成20年に確認調査が行われ（図１上段）、中期前葉を主とした土器や磨製石斧製作関連資料などが出土している。今後は確認調査時出土資料の検討をつうじ、上記のような見方の妥当性を考える必要がある。　　（前山精明）

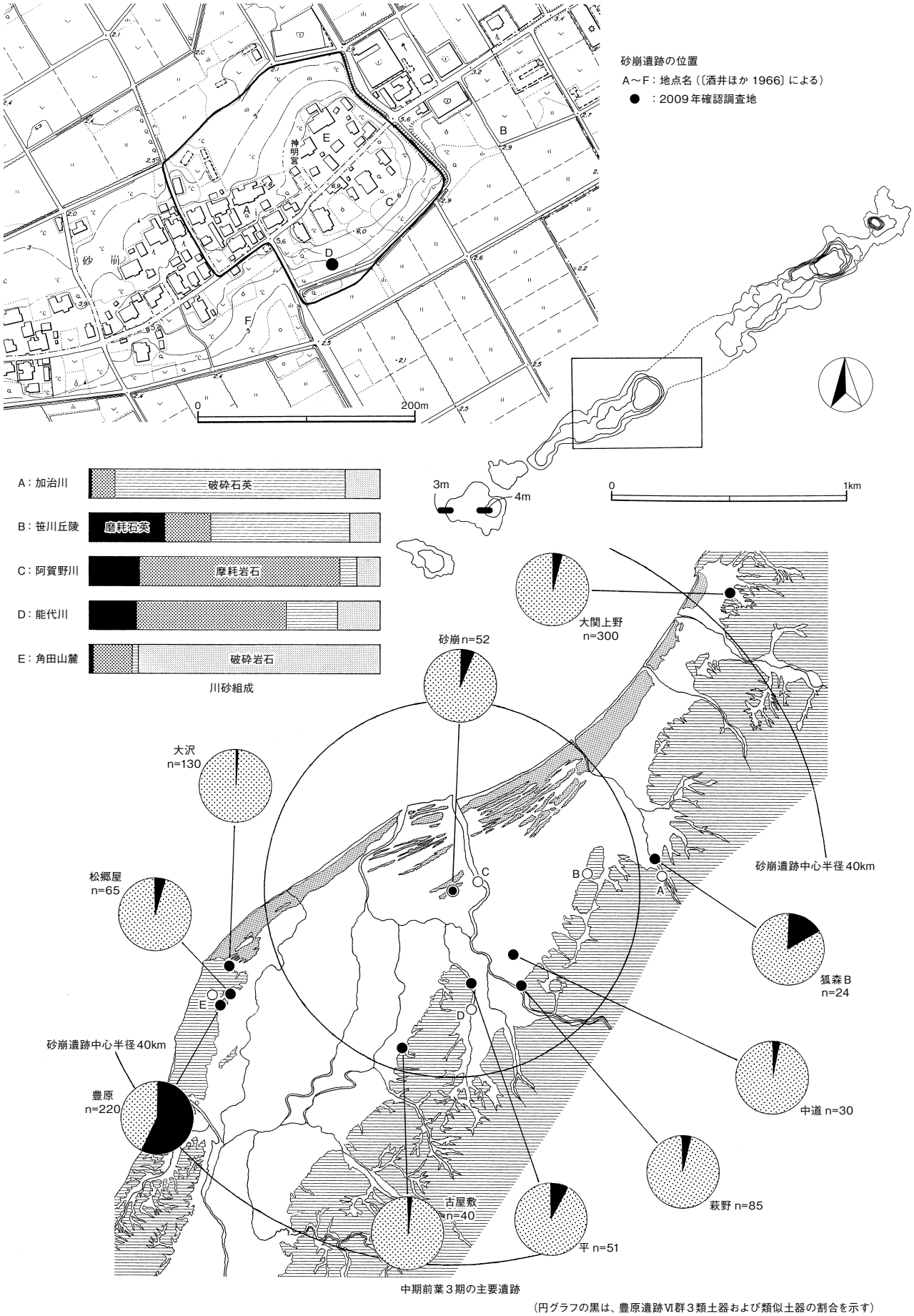

図1　砂崩遺跡の位置と周辺の主要遺跡

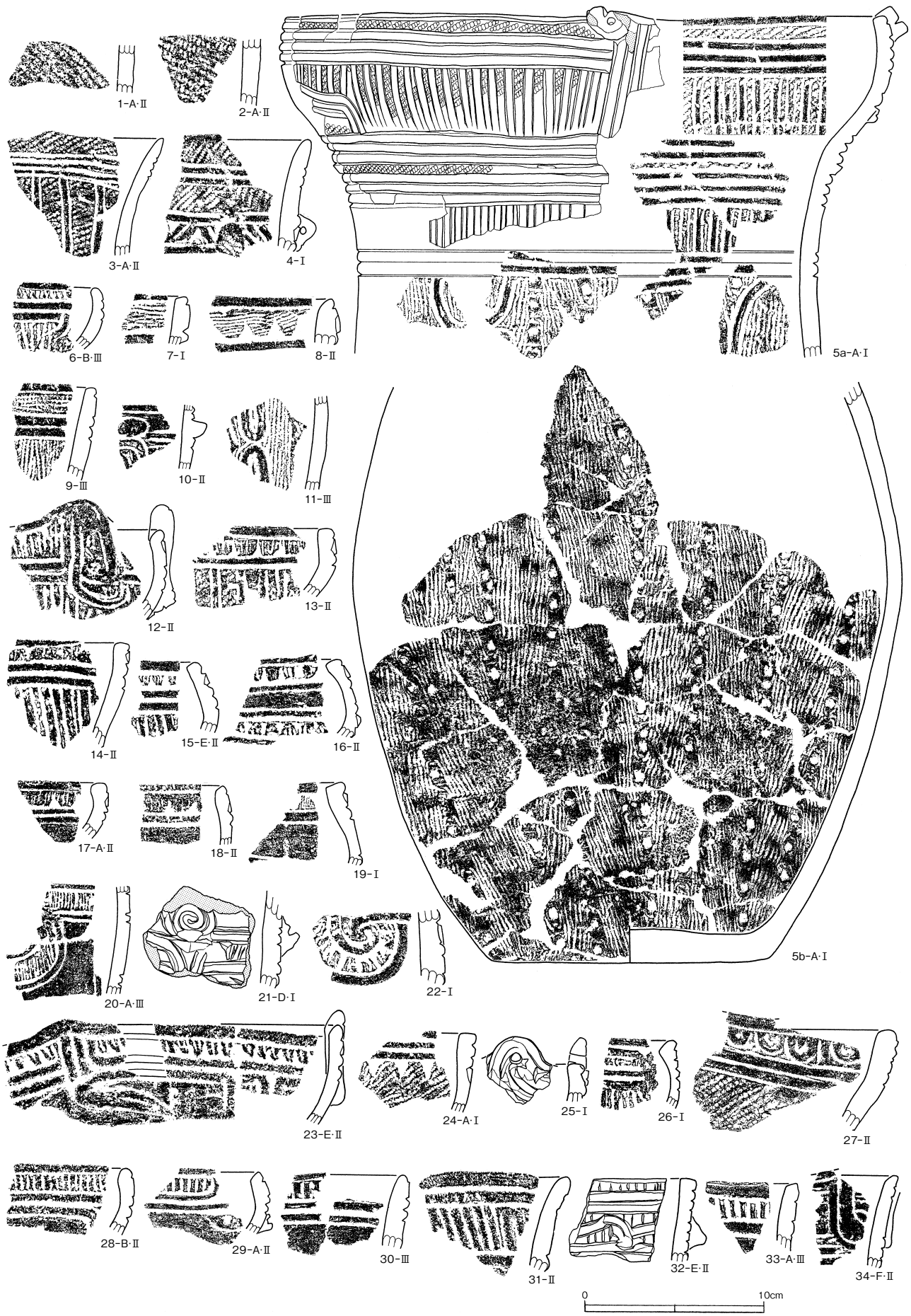

図２　砂崩遺跡採集の縄文土器（アルファベットは採集地点、ローマ数字は胎土分類を表す）

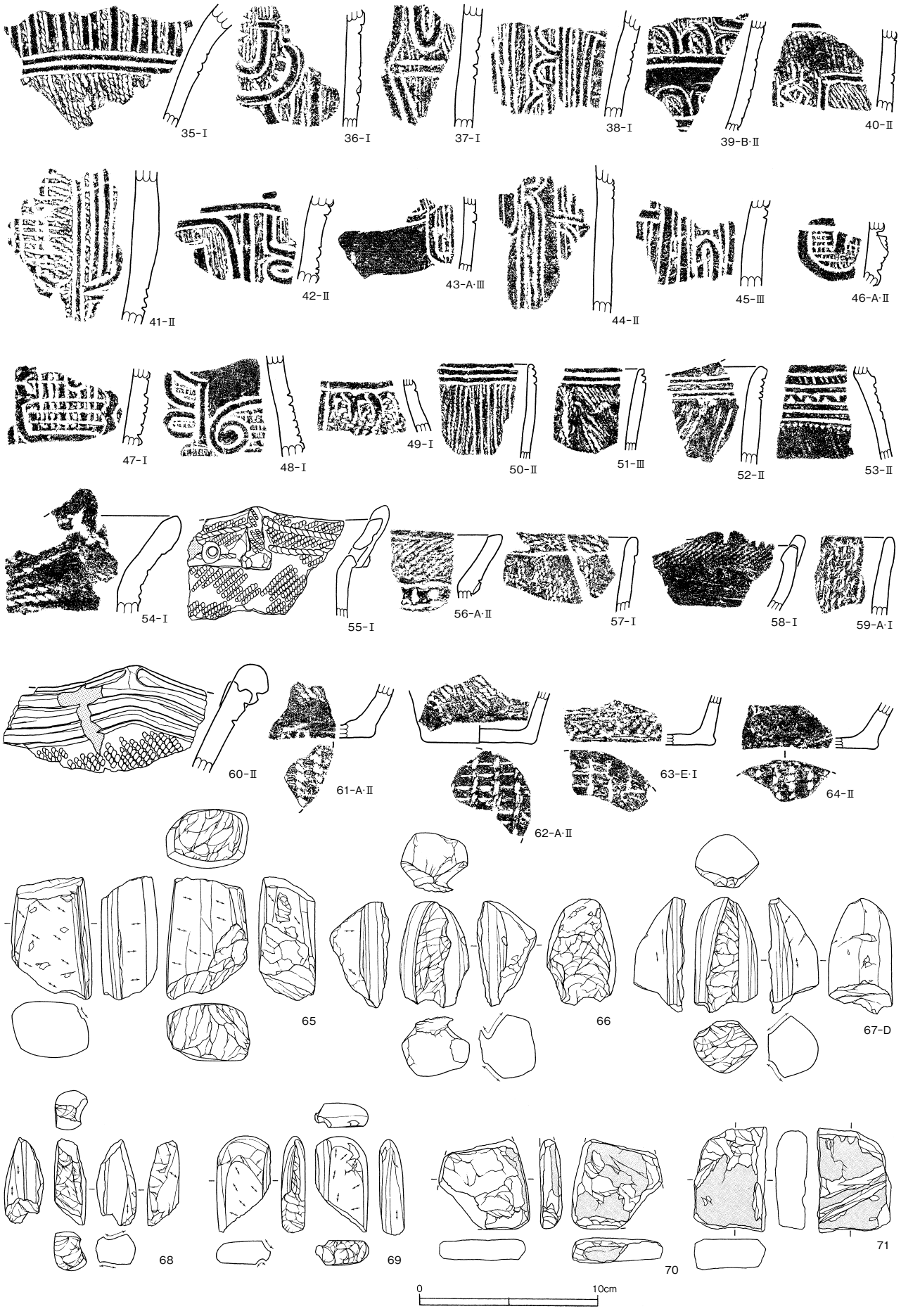

図３　砂崩遺跡採集の縄文土器と石器（65～69の断面図矢印は施溝部を表す）